

企業

福島の「今」を発信して、「自分の暮らし」について考えられる社会を作りたい

郡山市

日塔 マキ 女子の暮らしの研究所(株式会社 GIRLSLIFELABO)

取材日 2013.08.01

福島県郡山市出身。東日本大震災後、放射能の影響を危惧し自主的に県外に避難した。避難中、福島で起きている事がきちんと伝わっていないと感じ、福島の声を発信するため「女子の暮らしの研究所」を設立。ラジオ放送やイベントカフェの開催、会津木綿を使用したピアスの販売など「福島の今」を伝える活動をしている。

3月11日 14時46分

当時はイベント制作会社に勤務しており、イベントの買い出しをするためにスーパーマーケットにいた。お昼過ぎだったため、あまりお客さんはいなかった。近くには70歳くらいのおばあさん、ウィンナーを焼いている店員、そして5歳くらいの子ども2人が手をつないでいた。携帯電話の緊急地震速報が鳴り、地震が発生する事が分かったけれど、揺れは想像よりとても大きかった。とりあえず子ども達を抱えて座らせた。揺れはすぐに収まるだろうと思い、子ども達に「大丈夫だから」と声をかけた。しかし揺れは収まらず、天井や蛍光灯、棚にある商品が落ちてきた。ここで死ぬかもしれないと思った。一緒にいる子ども達の事も不安に思った。

入口から最も遠い場所にいたため、避難もできずに取り残されていたようだ。お店の男性店員が駆けつけてくれて、外への避難を促されたけれど、子ども達は怖くて立ち上がる事ができなかった。男性店員が1人、私が1人、それぞれ子どもを抱えて従業員用のバックヤードへ行くと、裏口が地震の影響で開かなくなっていた。女性店員が蹴破って入って来てくれたので、無事に外に出る事ができた。

外は真っ暗で、吹雪いていた。このまま日本が沈んでしまうのではないかと思う程の恐怖を覚えた。駐車場まで行くと、買い物客やパート職員がたくさんいた。地震の揺れが少し収まると皆帰っていった。私はイベントの買い出しの途中だった事を思い出し、店内に商品を取りに行こうとしたが、入れてはもらえなかった。仕方がないのでそのまま会社に戻ろうとしたが、近くに住む祖母が心配になり駆けつけた。家に着くと祖母は外に出ていて無事だった。家も被害はほとんどなかったが、落ち着くまでしばらく祖母のそばにいた。その後、親戚が祖母の家に来たので祖母の事は任せる事にした。今度は自宅が心配になり一旦帰る事にした。自宅は揺れの大きかった郡山市大槻町にある。建物自体は無事だったが家の中が悲惨な



状態になっていた。ピアノは約1m、食器棚も約50cm移動していた。食器棚は中の物はすべて床に飛び出していた。本だけが置いてある部屋ではアルミ製の本棚が曲がり、本の雪崩が起きていた。この部屋の様子を見た時は、思わずすぐに扉を閉めた。当時、母と2人暮らしをしていたが、母は出張中だった。この状況を1人でなんとかしなければならぬと思うと不安になった。

とりあえず会社に戻った。会社はコピー機が壁に突き刺さり、スチール棚が倒れてガラスが割れ、ファイルとガラスで散らかっていた。次の日はイベントの開催日で、イベント開催の有無を確認したかったが、クライアントと電話が繋がらない。社長と話し合った結果、イベントを開催するにしてもアルバイトスタッフの人員の確保ができないため開催を断る事に決めた。スタッフ全員の安否確認をしつつ、次の日は休みだと連絡を入れ、その日は帰る事になった。

自宅は停電していて自分1人しかいない。祖母の事も心配だったので、祖母の家で一晩過ごした。祖母の家は電気もガスも水道も被害がなく、野菜を作っていて、お米も味噌も蓄えがあったので食料にも困らなかった。しかし、隣の地区は私の自宅も含めて停電していたので、住民はコミュニティセンターに避難していた。

福島第一原子力発電所3号機爆発

2013年3月14日、福島第一原子力発電所3号機で水素爆発が起きた。彼から連絡があり爆発を知った。彼が祖母の家まで迎えに来てくれ、自主避難するかどうか相談した。祖母や叔母、皆と一緒に避難したかったが、福島に残ると断られた。出張の帰りに被災し、姉のいる神奈川に避難していた母は、祖母や家、会社の事を心配して福島に帰りたいがっていた。夜に避難区域が発表されるため、それを聞いてから母を連れて福島に戻るか避難するかを考える事にした。14日の夜、彼の車に乗って南へ向かった。夜のラジオで直ちに健康に被害はないとの発表を聞き、とりあえず母を迎えに行く事にした。その頃、神奈川から埼玉までの電車が数本だけ運行していた。運良く母もその電車に乗る事ができ、15日の朝に埼玉で母と合流し福島へ向かった。原子力発電所爆発の情報はとても早く広まったようで、車で移動している最中、4号線沿いには「福島ナンバーお断り」のお店を見かけた。ガソリンの入手が難しく、コンビニエンスストアも食料がほとんど無かった。福島に戻ったのは15日の夜の事だ。

帰ってきてから放射線量の発表を見るようになった。みるみる放射線量が高くなっていき、危機感を覚えた。会社の片づけをしなければならないが、外に出たくない。マスクをして、ベンチコートのような上着を着て会社に通った。人が通れるくらい会社を片づけた頃、予定されているすべてのイベントを中止し、3月末まで自宅待機が決まった。当時、ラジオの情報番組のパーソナリティーもしていた。木曜日の担当で、次は3月17日に放送しなければならない。ラジオでは緊急放送を流していて、24時間体制だった。せめて自分の担当の時間だけは放送しなければならないと思った。しかし、1度県外へ逃げているため負い目も感じていた。放送1時間前にスタジオに入ると、ラジオ局のスタッフに「今まで何していたの」と聞かれた。震災後から24時間体制で放送している人達を前にして申し訳なく思い、すぐに謝った。そして、自分の時間だけ放送をして帰った。そのラジオ局ではお子さんのいるパーソナリティーが多く、避難していて局に来られない方が多いと聞いた。残って放送をしてくれた皆に感謝している。

福島の今を聞いて欲しい

以前より、全国規模で事業を展開している会社に転職しないかと誘われていた。震災前の3月頭に浜松の支店長にお声がけいただき、1ヶ月や2ヶ月でもいいから手伝いに来ないかと誘われていた。3月は忙しいからとお断りしていたが、震災

後に再び支店長からお電話をいただいた。私が「イベントも中止している、放射能も怖いし、どうしたらよいか分からない」と話すと、「浜松なら今のところ安全だし、水も出るし電気もある。1ヶ月くらい出向してこないか」と誘ってくださった。それでもう一度福島を出る事を決め、4月中旬から6月中旬まで浜松でその会社のお手伝いをした。

外から見た福島は異常な状態だった。私が放射能を怖いと思っている事は、普通の事だ。けれども、福島県内では「怖い」と言う事さえもはばかられる。「怖いと言う人は逃げればいい、放射能があっても頑張ると言う人だけ残ればいい」という風潮があった。しかし、怖い事には変わらない。放射能から子どもを守れ、妊婦を守れという声はたくさん上がっていた。行政や民間も含めて多くのサポートがあったが、そこに支援が集中する事に違和感を覚えた。私には子どもはいないが、これから子どもを産みたいと思っている。これから子どもを産む世代の女性達は守られなくてもよいのだろうか。友人と話をしてみると同じ事を感じていたけれど、私達は仕事をしているため、今の生活を投げ出して避難する事はとても難しい。当時は国が安全だと言っていた事もあり、そもそも放射能や原発の話に触れる事がなんとなくタブーになってしまっていた。

2011年12月に東京の制作会社に転職した。福島の復興を支援する案件がたくさんあった。仕事をするうちに、本当に必要なところに手が届いていない気がした。例えば、被災地の子どもに対する支援が必要なのに、なぜか東京で笑顔を届けるプロジェクト企画がある。今起きている事や福島にある複雑な思いが伝わっていないと感じた。同時に、すっかり東日本大震災を忘れたように営まれている東京の生活に対して怒りを感じていた。彼らの生活を支えるために福島の原子力発電所があり、今大変な事になっているはずなのに、なぜこんなに人ごとなのだろうと思うと、とても悲しかった。結局その会社を2ヶ月で退職し、きちんと福島の声を発信していく事業に取り組もうと決めた。

女子の暮らしの研究所設立

2012年12月、原子力発電所の事故を受け、1人ひとりが「自分の暮らし」について考え、行動できる社会を作るため「女子の暮らしの研究所」を設立した。株式会社にしたのはこの会社だけで運営できるようにしたかったからだ。さらに決定権が自分にあるため、やろうと思ったらすぐにできる。個人事業主でもよかったが、契約する際に法人格が必要なので株式会社にした。

設立当時から行なっている事業で「女子の暮らしの研究所 LABOLABO ラジオ」というラジオ番組がある。以前、私が郡山のコミュニティラジオで放送していた枠をいただいて、継続して行なっている。若い女の子達が、放射能や原発を含む社会問題や政治など、多くの若者が無関心になっている事をテーマに放送している。「どうしたら皆で考えていく社会が作れるか」を大きなテーマとして、いろいろな人が考え始めるきっかけになるような番組にしたいと思っている。若い女の子達が選挙などについて話しているの、リスナーからは面白いと好評だ。コミュニティ放送ではあるものの、サイマルラジオ^{*1}やUSTREAMでも同時配信をしており、全国でも聞けるようになっている。そのおかげもあり、各地から応援メッセージをいただいている。

他にはイベントカフェを開催した。放射能だけでなく添加物や農薬も気をつけていきたいものだと伝えるために、それらを排除した安心安全な食べ物を提供するカフェを企画した。開催時期が2月だったため、知人が児童労働とフェアトレードをテーマに作った「バレンタイン一揆」という映画の上映会とセットにした。世界の児童労働について考え、今の福島の子どもの置かれている状況を考え、自分のこれからを考えるイベントだ。児童労働やフェアトレードは自分にとって遠い世界の事だと考えている参加者が多かった。何気なく買ってしまっているチョコレートは、地球の裏側で子ども達が泣きながら採ったカカオかもしれない。今福島で、母子で自主避難しているためお父さんに会えないと泣いている子ども達がいる一方で、地球の裏側では売られてしまって、一生親に会えず、こき使われて、教育の場も与えられず自分で選択して生きていく事ができない子ども達がいる。「はじめてそんな事を知りました」と泣いてしまう女の子もいたが、このイベントを開催してとても良かったと感じている。今まで考えてこなかった問題に思いを馳せる事によって、自分のこれからの生活を考えるきっかけにしてもらいたい。買い物は一番の意思表示だと思う。少し高くても、本来の値段をきちんと知っている若者が増えて欲しい。こうしたイベントカフェは2ヶ月に1度、福島県内の各地で開催している。

他にも「Fukushima Piece プロジェクト」を立ち上げ、福島伝統工芸品である会津木綿を使用したピアス「ふくいろピアス」を2013年3月8日より販売している。これは株式会社電通の「GAL LABO」とヤフー株式会社の「復興デパートメント」との共同プロジェクトだ。制作費はクラウドファンディング^{*2}を使って集めた。福島で暮らしている女の子の思いを聞いてくださいと言っても、唐突過ぎて聞いてもらえない。けれど



撮影：2013.3.10 ふくいろピアス出展販売

も、今福島で暮らす女の子が何を考えているのかを聞いて欲しいし、知って欲しい。そこで、福島の話をするきっかけにするために、物に想いを乗せて発信する事を考えた。可愛いものを身につけていれば「それ可愛いね」「これ福島のなんだよ」と会話が生まれる。私がいなくても、そんな風に福島の話が始まって欲しい。

時々でいいから福島のことを思い出して欲しい。そして、今もなお災害や放射能の被害が続いている事を気にかけてくれればと思う。ふくいろピアスはこれまでに約2000個を販売した（2013年8月1日現在）。買ってくださった方は、福島のことを応援したい、原子力発電に対してきちんと考えていきたいと思っている方が多い。福島のことを話し出すきっかけになってよいとも言われた。県内には会津木綿以外にも素晴らしいものがたくさんあるので、福島で自慢できる資源や素材を見つめ直して、自分達のアイデンティティとして確立しつつ、福島のことを伝えるきっかけづくりをしていきたい。

※1サイマルラジオ…コミュニティ放送局が自ら作成した番組を放送と同時にストリーミング配信するラジオ。

※2クラウドファンディング…インターネットを通じてアイデアに共感した不特定多数の人々から資金を集める手法。

発信の難しさ

「女の子も不安なんです」と声を出し始めた時、「将来、障がいのある子を産んでしまうかもしれないと思うと不安なんです」と言っていた。それは今、障がいを持ちながら生きている人達に対してとても失礼な事だ。しかし、当時はその一言で彼らを傷つけている事を想像できていなかった。自分の

事しか考えていなかった。それを猛烈に反省している。「障がいのある子を産んでしまうのが不安」と言っているのだから、障がいがあっても暮らしやすい社会を作っていけばよいのだ。その事に気づいたのは、ある会議の分科会で話した時だ。私は「福島の女の子は障がいのある子を産んでしまうのではないかと不安なのです」と発言した。その私の目の前に、障がいを持っている方がいた。その時、私は今までなんて事をしてきたのだろうと気づいた。でも、その方はうんうんと頷いて私の話を聞いてくれた。

この事はとても反省しているが、「原因が放射性物質によるものならば別の問題だから、不安な気持ちを持っていいのではないかと」言ってくれる方もいる。どんな言葉で伝えるのか、本当に発信の仕方は難しい。

大震災を振り返って

あれだけの大きな震災が起きて、原子力発電所の事故が起きて、その被害を受けてしまった事はある意味で不幸だ。原発事故や津波、地震の被害によって福島はコミュニティを分断されたなど、いろいろ言われている。しかし、原発やコミュニティ、高齢過疎化など多くの課題は、近い将来直面しなければならない問題だった。大震災によってそれが一気に起こってしまっただけだ。大きな



撮影：2013.4.20 ふくいろピアス出展販売

ストレスがかかったが、問題が顕になる事で考え始める事ができた。その点ではとても良い事だと思う。例えば、原発がこのまま何十年も事故がないまま稼働して、私が50歳や60歳になってから爆発したら。もしかしたら、その時は80歳かもしれない。身体的にも精神的にも動けなくて「さあどうしよう」とたじろぐしかない。しかし、今なら動ける。何とか自分の世代から歯止めをかけていく動きができる。今この年齢だからこそ動き出せている事は、ある意味で幸せだと感じる。だからこそ、できる限りの事を精一杯やっていきたい。



撮影：2014.2.19 福島県双葉郡富岡町 富岡駅 (EPOスタッフ撮影)



撮影：2014.2.19 福島県双葉郡富岡町 線路 (EPOスタッフ撮影)